パンと祖国：ファシズムの小麦戦争

新谷　崇

1. はじめに

本稿は，刊行済みの拙稿[1)]で論じた内容を基に，連続講座「食と政治―胃袋から支配する」で報告した発表原稿に加筆したものである。イタリアのファシズム体制における権力基盤の確保，人々の精神の掌握，体制への「自発的」動員の創出について，「食べる」ことやイタリア人の食卓に欠かせない「パン」という視点から考察した。

講演当日には「食と全体主義」を共通論題にドイツとイタリアそれぞれの事例が報告された。そのため，本稿だけでなく，ナチス体制下の社会について論じた藤原辰史氏の論考や，コメンテーターを担当した山手昌樹氏の解説を併せてお読みいただければ，全体主義性や農業プロパガンダの問題が，両体制の共通点あるいは相違点とともに，浮かび上がるに違いない。また，ドイツとの比較を念頭にしたことから十分に言及できなかったが，本稿が論じた事柄については，アメリカ合衆国のニューディール政策など1930年代に各国が抱えていた問題とそれへの対処という，より大きな文脈で考察すべきではないかという示唆を，質疑の場で受けたことも付け加えておきたい[2)]。

2. ファシズムの権力基盤と民衆の支持

はじめまして茨城大学の新谷です。私の専門は主にファシズム期のイタリアにおけるローマ教皇庁やカトリック聖職者に関わることです。そうした宗教分野にまたがる研究と，本日の共通論題である「食と全体主義」に一体どのような関係があるのかといいますと，それはイタリアが1950年代までは大多数の人が農村部に住んでいた国であり，そうした社会においては農村司祭とかれらを通じたカトリック教会が人々の間で大きな影響を持っていたという事実に由来します。私はカトリック教会が農業を司牧活動に活用したこと，とりわけ信徒が食べるパンの材料である小麦の増産に聖職者が積極的に打ち込んだ事例，その過程で農村司祭を中心にファシズムへの接近と支持拡大が生まれたことを研究課題にしてきました[3)]。ですが，本日は，そうした聖職者に関する事柄というよりは，ファシズム体制が食や農業を通じてどのように人々の支配，管理を貫徹させようとしたかについて，お話ししたいと思います。

本題に入る前にご覧いただきたい写真があります。ファシズム期の絵葉書ですが，ここには当時のイタリアにおける権力関係が典型的な形で描かれています。中央は首相でファシズムの総統ベニート・ムッソリーニですが，その左側には国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世が，右側にはローマ教皇ピウス11世が描かれています。ムッソリーニに率いられたファシストたちは「全体主義」を標榜しました。この全体主義という言葉が初めて用いられたのがイタリアと

いうのもよく知られた話です。ですが，全体主義のスローガンやその志向とは裏腹に，権力が分立し，絡み合っていたというのがファシズム体制が抱えていた特徴の一つです。まずは全体主義を標榜したムッソリーニが権力を掌握していく過程を確認しておきます。

ムッソリーニは，1919 年に「イタリア戦闘ファッシ」を創設し，ファシストを名乗っての政治運動を始めます。1921 年の下院選挙では，35 議席を擁すのに成功し，個人としても全国第三位の得票を獲得するなど，政治的に注目を集めます。翌 1922 年 10 月には「ローマ進軍」として知られる軍事的示威行動を起こし，それを機に国王から指名される形で首相の座に就くこととなりました。しかし，国会内では依然として少数派で，権力基盤は弱いままでした。

権力の掌握という点で大きな画期となったのが 1924 年の下院選挙です。その前年の 1923 年には，最多得票数の政党に総議席数の三分の二を与えるという法律（起案者の名をとって「アチェルボ法」とも呼ばれます）をファシストが脅迫も用いて通していました。この法律のおかげでファシスト党は国会の多数を掌握することになります。ここがイタリア史の一つの転換点といえるかもしれません。その後，ファシスト政権は人民投票という形で，体制への信任を定期的に確認しながら，権力を固めていきます。人民投票はファシスト側が設定した下院議員候補のリスト全体に対して賛成か反対で投票するというもので，1929 年と 1934 年に実施されます。体制の支持が最高潮に達したのは 1936 年，エチオピアの領有を宣言したときであったといわれます。そうした大きな出来事や発表があった際，ムッソリーニはことあるごとに人々を広場に集め，ラジオで演説を聞かせて，自身への支持を集めようとしました。

エチオピアへの侵略が原因で国際社会で孤立することになり，イタリアはドイツへと接近せざるをえなくなります。その後の 1939 年にファシズム体制は民意を問うことさえ廃止します。枢軸の一員として参戦した第二次世界大戦では，北アフリカ戦線で敗北を喫し，戦況を悪化させていきます。1943 年 7 月には，国王の命を受けた「ファシスト大評議会」においてムッソリーニは首相を罷免，逮捕されるに至ります。そして，イタリアは内戦の時代へと突入することになります。

ファシズム時代のイタリアは，一党独裁で警察と党によって人々を監視していたものの，権力基盤が必ずしも強かったとはいいきれません。全体主義を標榜していましたが，常に大衆の信任とエスタブリッシュメント層の後押しが必要でした。体制側も警察組織を用いて調査するなど，大衆の支持に関心を払っていたことが分かっています。支持を集められるか否かは，国家の課題を解決し，民衆の欲求を満たせるかに懸かっていました。つまり，暴力による一方的な支配というよりは，常に人々を体制に呼応させ，人々の間に支持の共鳴反応を起こすことで体制を維持していたといえます。

全体主義的体制を完成，維持するには，単なる支持ではなく，人々が自発的に体制に協力してくれる状態こそが理想的です。それはイタリアのファシズムだけにみられる特徴というよりは，全体主義的な社会に共通する性格かもしれません。こうしたある種の自発的協力のあり方を食とか農業といった観点から考えていく，それが本日の報告の狙いです。

3. イタリアが抱えていた諸問題

20 世紀初頭のイタリアは慢性的な食料不足に直面していました。イタリア人の暮らしにおいて不可欠な食料は何かといいますと，それはパンであり，その原材料である小麦の供給が追いつかない状態でした。

小麦生産の不十分さの背景にはまず，19 世紀半ばに急ごしらえで創った近代イタリア国家が抱えていた，行政組織と社会インフラの未整備がありました。そして，ファシズム体制以前の自由主義政府が，国内の産業振興や開発などを民間セクターに任せるという基本方針を取っていたことも，全国規模での農業の近代化を遅らせる要因になりました。統一以来イタリアは慢性的な財政赤字に苦しんでいましたから，一概に自由主義的政策のせいだけとはいえませんが，国家規模での行政の介入を欠いていたのは確かです。

20 世紀初頭のイタリアでは，農業分野への国家としての投資が十分に行われていなかったため，荒れ地や湿地が放置され，山間地の開発も進んでいませんでした。農地自体が少なく，その拡大も組織的に行われておらず，機械化，化学肥料の導入が遅れていたことから，生産性も低かったわけです。国土全体の小麦生産量が少ないままだったことから，不足分は輸入に頼らざるをえなかった。それが 1920 年代までのイタリアが置かれていた状況でした。1925 年の統計でみると，年間の総貿易赤字の半数を小麦輸入が占めるありさまです[4)]。そこにリラ安が重なり，イタリア経済と人々の家計を圧迫していたのです。

こうした生活苦に喘いでいたイタリア人たちに，追い打ちをかけるかのように，アメリカ合衆国が移民制限を導入します。それまでは食い詰めても出稼ぎを含む国外移民をすることで，なんとかしのげていた多くの貧しいイタリア人にとって，望みを絶たれる出来事でした。国外への出口を失った農村部の人々は，自ずと国内での都市部への移動を選択せざるをえません。しかし，当時のイタリアの産業規模では，流入してきた人々を吸収するだけの労働市場を用意できませんでした。小麦不足，物価の高騰，失業，無職の人々で溢れる都市の治安。こうした問題が深刻な社会不安を引き起こしていた時代に登場したのが，若き政治家ムッソリーニでした。

ムッソリーニは軍事的示威行動と国王の介入によって政権を手にしましたが，その権力基盤は脆弱なままでした。暴力を用いて影響力を増やしていく手法を白眼視する人も大勢いました。権力の座にとどまるには，国民の支持を集められる何か，それまでの体制との違いをみせねばなりません。当時のイタリアには，国民を食べさせ，生活に必要な資源を確保し，職にあぶれた人々に働く場所を与え，都市の治安を管理するという，難題が山積みになっていました。こうした政治課題を解決する，いや，解決したかのようにみせられれば，権力の維持と盤石化は大いに前進するはずでした。

そうはいっても事は簡単ではありません。経済的に豊かで資源に恵まれた国であれば，「上からの改革」で，国民に分け与えることができるでしょう。それが無理となると，どのようにして人々の間にファシズム体制への支持を創出するのか。そこで考案されたのがさまざまなプロパガンダ事業でした。とりわけ人々への伝達手段という点で，従来の活字，写真メディアにくわえ，最新技術であったラジオと映像が注目されました。その着目にこそファシズムの特徴が

あったともいえます。

時代は少し後の 1937 年のことになりますが，プロパガンダをより効果的に行い，人心を掌握，管理するために，ファシズム体制がそれまでの諸組織を再編し，設立したのが「人民文化省」でした。ファシズムはメディアを駆使するための組織づくりを進めました。体制のプロパガンダ・ニュース映画を制作する機関「ルーチェ」が 1924 年に，「イタリアのハリウッド」とも称される映画撮影所「チネチッタ」は 1937 年に開設されます。現在も続く「ヴェネツィア国際映画祭」が始まったのもファシズム体制下の 1932 年でした。とくに最優秀作品に与えられる「ムッソリーニ賞」は体制の意向が作品選びに反映されました。こうした映像に関わる組織や事業は，ファシズムの成果を人々の面前で可視化し，より強烈に印象付けるという共通目的を有していました。

本日のテーマであるファシズムの食料供給に関しても，具体的な農業政策と，その成果をプロパガンダで大きく膨らませる作業の組み合わせからなっていました。とりわけ問題を単純化しつつより強い印象を与えられる映像メディアの活用は積極的に行われました。

それでは，ムッソリーニが実施した具体的な政策を押さえつつ，それがプロパガンダ上どのように表現されたのか，そして伝達されるメッセージの受容と応答がどのように自発的協力を生み出していったのかについて，段階を追ってみていきましょう。

4. 食べることとナショナリズム

ファシズムがまず対処しようとした問題は，農村から都市への人口流入を防ぐことでした。そのため，公共事業を通じての失業対策と，農村生活の素晴らしさを説く反都市化のプロパガンダが実施されました。くわえて，1925 年になると，二つの大きな事業が始まります。一つ目が本報告の中心的話題である，食料生産量を上げるための事業「小麦戦争」で，もう一つが農地の整備や居住地の開発などを含む「国土総合開発」でした。まずは国土総合開発から説明していきます。

国土総合開発で目玉とされた事業は，湿地とか荒れ地を開拓し，灌漑設備や上下水道を整え，交通インフラを整備し，農地を拡大する，その開拓地の中心に新しい農村都市も造り，イタリア国内から人々を植民させるというものでした。こうした事業が実行された場所としてよく知られるのが，20 世紀に入ってもなお湿地帯が広がっていたローマ南部の地域でした。ここに造られた代表的な町にリットーリア，現在はラティーナという名の場所があります。

都市建設には大変な予算，人員，時間をつぎ込んだ大掛かりな工事が伴います。体制はリットーリアができる過程をニュース映像にします[5)]。その映像には，湿地が広がり，建物もまばらで，マラリアを媒介する蚊が飛び交っているような取り残された土地が，工事によってみるみるうちに都市と農地へと生まれ変わっていく光景，同時に，そこに住む人々の暮らしぶりも清潔で近代的なものに変化するさまが時系列に映し出されます。開発前の光景を映す画面は心なしか暗く，背景には陰鬱な音楽が流れるのに対し，開発が進むとともに，画面が明るくなり，音楽も陽気なものへと変化するなど，単純化して観る人が違いを捉えやすいような仕掛けがなされています。しかも，この 10 分少々の映像は，1932 年 12 月 19 日に開催された町の完成式でファ

シズムの成果を高らかに宣言するムッソリーニの演説シーンで締められます。国土と国民生活が劇的に変貌する姿を可視化し，それがムッソリーニとファシズムのおかげであると理解させ，国民の体制への支持を形成しようとする意図が明白です。

（写真・図版 1：リットーリアの街並み。R. Sciarretta（a cura di), *La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 250 所収）

ファシズム体制が建設した都市の成果は小学生向けの読本においても繰り返されました。『犂と剣』というタイトルの本の一節に「初めてのパン」と題されたお話が載っています[6)]。入植した農民家族がこの地で初めて収穫した小麦で作ったパンを手にしています。母親がパンを焼き，それを思い思いに頬張る子供たち，満足感とともに父親はその光景を微笑みながら見守ります。添えられたピオ・プッリーニ作の挿絵からも家庭の団らんがよく伝わってきます。ここでは細かな分析はしませんが，イタリア人の食卓に欠かせないパンによって家族の温かみや幸福が象徴されている，とても情緒的な光景であるといえます。

私が注目したいのはまさにこの情緒的な面です。かりにこの幸福を失いそうになった場合，もしくはその危機感が煽られたとき，どういうことが起きるでしょうか。過剰な防衛反応が働いてもおかしくはありません。さらに，そこから排外的なナショナリズムへと転換させるのは，さほど難しいことではなかったと思うのです。

そもそも食というものが，われわれにとって日常的な行為である一方，その習慣が民族の伝統や故郷の思い出などと密接であるという性格を有しています。たとえば，日本人であれば秋になれば秋刀魚などを，自分たちだけが固有に有すると思い込みがちな季節の味であったり，自分たちの大切な文化の一部であると認識するかもしれません。さらには地域ごとの食材や調理法のバリエーションもあるでしょう。漁業資源の管理は地球的な課題ですが，何かの漁獲量を規制された場合，文化を脅かされていると錯覚しかけたりすることはないでしょうか。

ようするに，食べるという行為が，民族のアイデンティティーと関連することからナショナリズムと親和性が高いうえに，食卓の温かさの記憶につながることから家族と共同体意識にも結びつきやい性質をもっているわけです。外の敵への憎悪を煽りやすく，仲間内での結束を固めるのに好都合な事柄といえます。しかも，食い物の恨みは恐ろしいという言葉もありますけ

れども，空腹はとても強くて継続的な負の感情を引き起こしやすい。

ところで，その失いたくない幸せ，それはパンに象徴されますが，人々はどのように手に入れたのでしょうか。ムッソリーニがプロパガンダ技術を駆使して盛んに訴えたのはまさにこの点だろうと思います。現にムッソリーニはイタリア人が十分なパンを手にすることになるとの発言を繰り返していました。開拓された新都市の造成過程を描いた映像をムッソリーニの演説で締めることにもその意図がよく現れています。家族を食べさせたい，故郷や地域共同体を守りたいという人々の素朴な思いと，自分たちに力を貸してくれるムッソリーニに協力するという利害が一致しやすいわけです。当初は自分たちの家族とパンを守るためという意識だったとしても，その行為が次第に故郷，ネイション，祖国への貢献であったり，ファシズム体制やムッソリーニへの協力などと境界が曖昧なまま結びついて一体化していく契機が，ここに埋め込まれていたのではないでしょうか。

この連続講座の共通テーマの副題には「胃袋から支配する」とあります。まさにそこが肝心です。体制は「胃袋を」支配しようとしたのではないのだと思います。食べさせる，食べさせないの話であれば，それは食料配給と分配量，どの程度のカロリーを摂取させるか，それを通じて服従させる，という話で終わりです。そうではなく，ファシズムであれナチズムであれ考えたのは，胃袋から人々の心，精神，振る舞い，行動様式の部分にまで介入し，そこをどう自分たちの都合のいいように管理，支配するかというところだったのではないでしょうか。都合のいい状態とは，体制に自発的に協力する国民になってくれることです。とはいえ，そこには一飛びに至ることはできません。ここまで検討してきた家族とパンをめぐる情緒的世界，感情面への働きかけというのは，体制協力へと至る第一歩と位置付けることができます。

5. ファシズムの小麦戦争

ファシズム体制の農業に関わる主要政策として二つ挙げましたが，もう一つの主要な政策である小麦戦争を概観しながら，ファシズム体制がどのように人々の自発的協力を引き出すこと，それ自体の意味を考えていたか，みていきたいと思います。

イタリア人は必要なパンを手にするであろうというムッソリーニの掛け声のもと，穀物の完全自給達成が目指された事業が小麦戦争でした。その動員規模はイタリア全土を巻き込むほど大きなもので，最先端の科学と技術が投入されます。生産力を上げるため，研究機関が整備され，小麦の品種改良や栽培法の実験，開発が行われました。そして，農業の合理化を全国規模で進めるため，トラクター，種まき機，脱穀機，化学肥料の利用を広めるような宣伝活動も盛んに実施されました。

しかし，当時のイタリアの行政網では，国土の隅々にまで先端の農業技術を指導できる人員を配置できたわけではありません。基本的には，技術者が持ち場の広い地域を回りながら教える，巡回農業講座が実践されました。それから，各基礎自治体（コムーネ）に実験・見本用の畑を設置して，新しい農法の効果を目にみえる仕方で提示して農民を納得させようとしました。さらに，巡回講座だけでなく，トラックのキャラバン隊がイタリア各地を回り，映画を上映しながらの啓蒙活動を行われました。

（写真・図版２：啓蒙活動を行うキャラバン隊のイベント告知ポスター。R. Sciarretta（a cura di），*La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 71 所収）

小麦戦争の号令のもと全国規模で実施された農業の近代化ですが，ムッソリーニはたびたび農村を訪れ，そこで農民とともに収穫作業を行ったうえで，演説をするというパフォーマンスを繰り返します。その際の報道におけるムッソリーニの姿にも工夫が施されます。農民と一緒に収穫作業をし，トラクターにも乗る，あるいは上半身裸で農作業を行う写真やイラストがメディア上には溢れます。収穫姿を拡散する手法が同時代の他の政治指導者にも共通するものとは思えません。いずれにせよ，ムッソリーニとその体制は，一農民として民衆と同じ立場で畑仕事をする姿を大衆に示すことに効果を見出していたのでしょう。ムッソリーニはさらに，外国のことを非難する演説をする際にも，わざわざ農村部を訪れ，農作業を終えてすぐさま，上半身裸のままで聴衆に訴えかけます。その行為は，農民への近さや庶民と同じ立場で苦しみを共有していることのアピールになったに違いありません。それだけでなく，農民たちを背後に演説することで，かれらに象徴される一般の国民たちの先頭に立ち，その暮らしを守るために外国と戦っている姿として表現することも意図されたと思われます。

ムッソリーニは 1925 年 7 月の演説においてすでに，「小麦戦争とは，外国のパンへの隷従からイタリア人民を解放することである」と述べています[7)]。小麦を輸入に頼らざるをえないイタリアは外国勢力の言いなりである，その状態からイタリアを解放するのが自分の仕事であり，そのための小麦戦争だと繰り返します。主食という概念はヨーロッパにはないかもしれませんが，みようによってはパンをイタリアの主食のようなものとして考えることもできます。家族や伝統的共同体の中核であるべき存在なはずなのに，そのパンが外国と資本主義的なものの手に握られているというストーリーは，ナショナリズムを煽り，自分たちの方へと国民の支持を集めるのに好都合なものであったでしょう。しかも，ムッソリーニは粗末な格好で貧しい農民

LA VITTORIA DEL GRANO

ILLUSTRAZIONE AGRICOLA ITALIANA

Il popolo italiano avrà il pane necessario alla sua vita MUSSOLINI

（写真・図版３：雑誌に掲載された麦を刈るムッソリーニの写真。R. Sciarretta（a cura di），*La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 60 所収）

と同じ目線で訴えかけたわけです。

ムッソリーニは 1933 年，国内の需要を満たしたとして小麦戦争の勝利宣言をします。実際に数字上は成果を挙げます[8)]。1924 年から 1928 年の間は 72％程度だった自給率が 1933 年には 100％に達します。しかし，その内実に関しては指摘すべきことがあります。穀物自給は達成されたが，それはあくまで量の話で質までは保証されていませんでした。自給率達成を急ぐあまり，地域ごとの気候や土壌の特性を無視して小麦に転作したせいで，畜産に必要な飼料不足を引き起こしたり，果樹などの輸出作物の発展を阻害する事態が生じたというのは研究史でもよく言及されることです[9)]。また，採算よりも生産量の増加を優先したため，投資費用がかさみ，それが小麦価格の高騰をもたらしてしまいました。そのため，貧しい人は，大麦，ガラス麦，コメや他のものによって炭水化物分を代替せざるをえなくなりました。

以上のような問題があったにせよ，1925 年に始まった小麦戦争が 1933 年には早くも一応の目標を達成したのは驚くべきことです。それは小麦戦争が多くの人を巻き込んだことの証左でもあります。なかでもひと際大勢の人が参加したイベントがありました。それは１ヘクタール当たりの収穫量を競う「小麦の勝利のためのコンクール」でした。新しい農業技術を実践することを通じて，農業の近代化，合理化を社会に浸透させていくことが目的とされていました。ちなみに，ファシズムは小麦戦争に限らず，順位付けをするコンクールを，作文から家事，オフィスワーカーの作業まで，さまざまな分野で何かにつけ開催しています。

このコンクールという手法は，よくよく考えると非常によくできています。収穫量として成果が可視化されるので，体制の事業への参加の意志，態度，努力を把握しやすい。たとえば，周辺地域と比べて自分の支部の成果が上がっていない場合，その地方のファシスト党幹部は心

中穏やかではないでしょう。競争心が湧く，もしくは立場上何かやらざるをえないので，より多くの人を動員する，参加者に発破をかけるということも起きたに違いありません。農民の間でも同様のことが起きえます。自分より周りの農家がいい結果を出すと，体制への忠誠心，自分の努力不足を疑われます。そもそも，コンクールの性質上，高得点を獲得するには体制側が提示した手順を踏襲する必要があります。そこには，競争しながら体制のイデオロギーを自己規律化してすり込むメカニズムが内在されているわけです。

人々をコンクールへと吸引したのは単なる競争心や世間体だけではありません。優秀者には賞金が与えられましたし，さらに，全国レベルでの優勝者たちはムッソリーニから直接表彰されるという栄誉に浴しました。毎年秋にローマで行われた表彰式の模様は，新聞や雑誌の報道はもちろん，ラジオを通じて全国中継までされました[10]。国民の絶対的リーダーであり憧れの存在である総統ムッソリーニに直接会って褒められるということは，自分もそうした栄誉に与りたいという欲求，社会的に認められたいという感情を人々の間に生むことになりました。競争心や名誉欲などを煽りつつ，事業に人々を参加させることで，体制への協力を引き出す素地が作られていった，これがコンクールという手法が有した効果だったと思います。

コンクールの募集ポスターには人々を体制協力へと引き込むやり方が見て取れます。「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。DACCI OGGI IL NOSTRO PANE QVOTIDIANO」と書かれており，これは聖書の一節でイタリア人が聞きなれたフレーズです。聖書のマタイ７章９節にも「自分の子がパンをくださいと言うとき，誰が石を与えるでしょう」とあります。子どもにパンを与えるために努力すること自体は誰も否定できませんし，それが聖書に書かれた有名なフレーズとともに心に訴えかけるようになっています。問題は，そうした誰しもが否定で

（写真・図版４：第８回コンクールの募集ポスター。R. Sciarretta（a cura di), *La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 68 所収）

きない価値観や行為が，国家への協力とか忠誠といった違うところにすり替えられていくというのがこの小麦戦争が有したメカニズムなわけです。

さらに，外国小麦への隷従から解放し，ファシズムこそがイタリア人にパンを与えるといった，あくまでプロパガンダとして繰り返されてきた言葉が，現実感をもって響くような事態が起きます。穀物の自給達成宣言が1933年でしたが，それから間もなくの1935年，イタリアはエチオピアへの侵攻を開始します。加盟国への侵略行為ということもあり，国際連盟はイタリアに経済制裁を科します。この制裁は抜け穴が数多くあり，実効性がほとんどありませんでした。しかし，ファシズム体制はそのことを逆手に取ります。国民に向け，国際連盟はイタリア人の空腹に付け込むように圧力をかけてきていると，訴えます。イタリア人が貧しくパンにありつけないのは外国資本のせいだと言われてきたが，イギリスとフランスが主導権を握る国際連盟から経済制裁を科されたことで，それまでの話の辻褄が合ったかのような錯覚を国民に与えたわけです。食という生命維持に関わる分野が外国勢力に脅かされているという危機感は，容易に排外的ナショナリズムと内での結束強化へとつながります。

この経済制裁を機にイタリアは，自給自足的な経済政策いわゆる「アウタルキー政策」へと舵を切っていきます。そして，1937年には国際連盟を脱退し，ドイツや日本に接近していきます。国際社会での孤立の進展によって，イタリア国内では物資が不足していきます。人々にはどのようにして耐乏生活を受容させるか。体制が採った手段は，外国勢力の仕業であることを強調することで人々の外国への敵対心を煽り，ナショナリズムを駆動しつつ，物資不足を乗り切るために国民が協力し合い工夫するよう呼びかけることでした。モノを無駄にしない，再利用する，金銀などの貴重品を国家に供出する，輸入できない物資は他のもので代替するといった運動が，体制側からだけでなく人々の間からも起きていきます。自分たちのパンを外国から取り返すという実践を伴った行為の繰り返しを通じて，徐々に，全体への貢献の素地ができあがっていたわけです。

アウタルキー政策の進展は当時のポスターにも反映されます。ここには「われわれ労働者の子どもたちからパンを取り上げないようにしよう。イタリアの国産品を購入しましょう」と書かれています。子どもとかれらに食べさせるものの象徴としてのパンの利用がファシズム体制の常套手段であるのは確認してきた通りです。苦しい状況を作っているのは外国勢力のせいであり，それを打破するための政策がアウタルキーと小麦戦争であるというように関連付けられてプロパガンダされていきます。こちらのポスターではイタリアが外国に縛らている縄を「小麦戦争」で断ち切って，「アウタルキー」で生産する図柄が描かれています。

（写真・図版５：悲しそうな表情でパンを持つ子どもの絵で訴えかけるポスター。R. Sciarretta（a cura di），*La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 62 所収）

（写真・図版６：アウタルキー政策と小麦戦争の価値を訴えるポスター。R. Sciarretta（a cura di），*La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 19 所収）

6. ファシズム体制の意図と性質

エチオピア戦争とアウタルキー政策への転換後，イタリアは枢軸の一員として第二次世界大戦に参戦し，敗北と，内戦を経験することになります。そこに至るまでにみられた，ファシズムが小麦戦争や食，農業に関して有していたであろう隠された意図というものを考えながら，全体を総括し，本報告を終えたいと思います。

政権奪取当初のファシズム体制が取り組んだのは国内問題の解決でした。国土の大掛かりな開発を伴いながらイタリアの農村地域を近代化し，農業を合理化しようとするものでした。土地の開発，インフラの整備，農業技術の研究・普及を行うために，テクノクラート的な人材が活躍しました。近代的手法で穀物を増産する，人々は作業に励み収穫量を上げる，一見すると価値中立的なものに思われる事業でした。

問題は，技術を農村社会に導入するという回路を通じて別のものが，つまり体制のイデオロギーも流れ込んだことです。そこが小麦戦争が有した巧妙な面であろうと考えます。ファシズム体制はプロパガンダ技術に大きな関心を有していました。小麦戦争では，子どもの絵や家庭の団らん，その喪失など，単純でありきたりな形式で情緒に訴えるプロパガンダが溢れます。コンクールとして大勢の人が収穫量を競うという行為も，冷静に考えれば突拍子のないものです。そうした子ども騙しともいえる側面を覆い隠したのは，農業の近代化や合理化といった技術的な装いであるし，食料を増やさないといけないという切実さであったろうと思います。

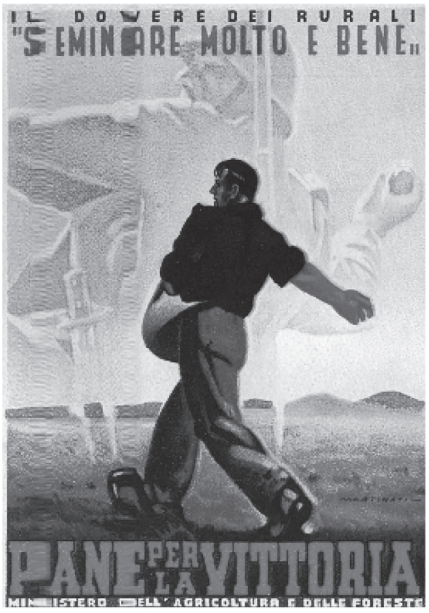
そもそも食べることやその素材を生産する農作業は生命の根源に関わる営みです。当然イタリアに限らず各国の体制はこの分野に多くの関心を払っていました。食料供給は体制への支持や国民の士気を維持するのに重要なだけでなく，戦争の遂行にも不可欠な事柄であることは第一次世界大戦の教訓として認識されていました[11)]。さらに，ファシズムであれナチズムであれ，両体制は，人口をどう増やすかについて大きな関心をもっていました。人口は国力と兵員数に直結しますし，食べることでもたらされる健康は兵士の強さや子供を増やす多産性にも結びつくからです。小麦を増産すれば，自分たちが構想するような国力増強が図れるだけでなく，大衆の支持も集まり，政権奪取以来の課題であった権力基盤の強化にもつながるというメリットがありました。そのため，まず農民や庶民の心に響くような情緒的なプロパガンダを行ったわけです。土地は，健康や多産の源であり，家族，共同体，祖国の基盤でもあります。食は民族のアイデンティティともつながります。そのためナショナリズムに訴えやすいという性格を有していました。

しかし，ファシズムの狙いはそれだけではありません。農業や食べることがどうして全体主義的支配とつながったのでしょうか。ファシズムの取り組んだ別の課題として，農村の余剰人口の扱いもありました。都市に人口が流入，失業者化し，反政府的な運動に参加することは避けたい。そのため，国内での人口移動を阻止し，農村に人々を留めておきたいと考えました。なぜなら質素な暮らしになれた農民のほうが管理しやすいと見なしていたからです。この点は本報告では触れることができませんでしたが，節約，質素な価値観を身につける，命令に従う，規律を守る，自発的に犠牲になるといった，忠実な人間をつくるための理想的な実践行為として体制側は農業を考えていました。ムッソリーニは「新しい人間」という名称とともに，そう

した規律あるイタリア人の創造を政治目標に掲げていました[12)]。

最終的に，規律をもち自発的に全体のために奉仕する精神を身につけた先に用意されていたのは農地ではなく戦地でした。そもそも小麦戦争においては言い回しが象徴的です。多くが軍事とのアナロジーになっています。事業名からして「小麦戦争 battaglia del grano」です（ただし，「battaglia」は「闘争」とか訳したほうがより正確かもしれませんが，「戦争」の意味合いもあります）。小麦戦争を実行する中央委員会は「参謀本部」，地方委員，農業技術者，教師などは「士官」，農民は「軽装歩兵」とこの事業においては呼ばれていました。農地はイタリア語で「campo」ですが，この語は「戦場」という意味もあります。小麦を植える「畔溝 solco」は「塹壕」をも意味します（ただし，軍事的用語としては「trincea」）。当時のイタリア人にとって塹壕とは第一次世界大戦を連想させるものでした。ファシズムに初期段階から集ったものの多くは，塹壕に籠り敵陣営に突撃するという悲惨な戦いを経験しており，ファシズムはその記憶と結びついていました。このように軍事的な言い回しがためらいもなく連呼されたことにも小麦戦争の性格と狙いが現れていると思います。

こちらのポスターは有名なものですが，種をまく農民と手りゅう弾を投げる兵士の姿が重ねられています。このイメージから見て取れるのは，戦場と銃後の連続性，農民と兵士の互換性です。農業を通じて規律を持って祖国のために尽くすことを身につける，そのうえで犂を小銃に持ちかえて出征する流れともいえます。こうした狙いが露になるのが第二次世界大戦でした。つまり，小麦戦争が有した重要な性格は，戦争のリハーサルもしくは戦争の日常化であったのではないかと考えます。



（写真・図版 7：勝つためのパンと題されたポスター。R. Sciarretta（a cura di），*La Battaglia del Grano: autarchia, bonifiche, città nuove*, s.l., Novecento, 2014, p. 78 所収）

早急な国家統一によってできた近代イタリアの特徴としてよく挙げられるのが国民意識の欠如です。ファシズムは，そうしたイタリア人たちをいかにして国家の側に呼び寄せるか，しかも自発的な協力と献身性をもって，ということに最大の関心を払った体制といえます。根底には，国家への犠牲心を国民に植え付け兵士化する，言葉を換えると，「ファシスト化」の目論見がありました。

そうしたファシズムの支配貫徹にとって農業は好都合なものでした。小麦を増やすこと自体に異を唱える人はいません。人々の生活に対処しているわけですから体制への支持も生まれます。そこにさまざまな事業やプロパガンダを接続し，イデオロギーを挿入していきました。人々も当初は家族にパンを食べさせる，分かりやすい農業政策をしてくれるのでムッソリーニを支持しましたが，時とともに，自分たちのパンが脅かされているので外国から防衛する，そのためにファシズム体制に協力する，というように行動と考えを変化させていきました。ただし，その変化はあまり意識されなかったのではないかと思います。農作業は毎年のサイクルで回るので日常化させやすいという性質があります。そのため，同じような行動を繰り返しながら，意識させず徐々にイデオロギーをすり込みやすかったと考えます。

以上のように，第一次世界大戦の総力戦で浮かび上がり，政権を握ったムッソリーニも直面した，食料問題という最大の国家的課題をてこにしながら，ファシズムは，人々の支持を集めるだけでなく，その支配のあり様を広めていったのです。人々にとってはパンを食べるという胃袋の問題であったはずが，いつの間にか国家への協力，自発性，献身といった心や振る舞いの部分にまで胃袋から支配が及ぶことになった，といえるのではないでしょうか。

注

1）新谷崇「ファシズム・イタリアのプロパガンダ研究：「小麦戦争」を例に」『日伊文化研究』52, 2014 年, pp. 77-91。

2）W. シヴェルブシュ（小野清美，原田一美訳）『三つの新体制：ファシズム，ナチズム，ニューディール』名古屋大学出版会，2015 年などを参照。

3）Takashi ARAYA, “Il più grande evento dopo la Conciliazione: Scenari e retroscena della fedeltà dell’episcopato italiano al fascismo”, *Annali della Scuola Normale Superiore di Pisa. Classe di Lettere e Filosofia*, 10（2）, 2018, pp. 611-644.

4）D. Preti, “La politica agraria del fascismo: noteintroduttive”, *Studi Storici*, a. XIV, n. 4, 1973, pp. 810-812.

5）「ルーチェ・チネチッタ協会」が YouTube に開設しているチャンネルにおいて視聴可能。“Dall’acquitrino alle giornate di Littoria”, URL: https://www.youtube.com/watch?v=LmiVuKCbEnk【閲覧確認日：2020 年 1 月 13 日】。

6）A. Petrucci, *L’aratro e la spada: letture per la terza classe dei centri rurali*, Roma, La libreria dello Stato, 1941.

7）B. Mussolini, *Scritti e Discorsi di Benito Mussolini, vol. 5*, Milano, Hoepli, 1934-1940, pp. 125-126.

8）B. Mussolini, *Scritti e Discorsi di Benito Mussolini, vol. 7*, Milano, Hoepli, 1934-1940, p. 275.

9）丸山優「イタリア資本主義とファシズム」ファシズム研究会編『戦士の革命・生産者の国家：イタリア・ファシズム』太陽出版，1985 年, pp. 135-194; L. Segre, *La Battaglia del grano: Depressione economica e politica cerealicola fascista*, Milano, CLESAV, 1982; G. Tattara, “La battaglia del grano”, in G. Toniolo（a cura di）, *L’Economica italiana 1861-1940,* Roma-Bari, Laterza, 1978.

10）1936 年の表彰式は視聴可能。URL: https://www.youtube.com/watch?v=b1kwkZvxTAY【最終閲覧確認日：2020 年 1 月 13 日】。

11）日本が食料供給の観点から第一次世界大戦とヨーロッパ諸国を研究し，植民地を利用しながら食糧の自給自足の達成を宣言したことについて言及している以下の先行研究も，全体主義と食を考えるうえで示唆に富む。シャルドン・ギャロン「日本史の立場からトランスナショナル・ヒストリーを書く」羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社，2017 年，pp. 106-138.

12）「新しい人間」はムッソリーニの統治，人民支配のあり方を考えるうえで重要な概念である。最新の研究に以下のものがある。P. Bernhard e L. Klinkhammer,（a cura di）, *L'uomo nuovo del fascismo. La costruzione di un progetto*, Roma, Viella, 2018.